

<「知るっば！久留米」 令和4年2月17日(木) 12:30~放送分>

## 三漕地域の魅力 ～第3回～ 「三漕地域の歴史」

<ゲスト：くるめ創業ロケット 創業支援相談員 北村嘉伸さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、久留米市の南西部に位置する『三漕地域の魅力』をテーマにお送りしています。

ゲストはこの方です。

ゲスト:北村さん(以下「北村」)

こんにちは!三漕に住み続けて65年。三漕のことならおまかせの北村嘉伸です。

よろしくお願いします。

坂本 3回目の今回は、『三漕地域の歴史』にスポットを当ててお送りします。

まずは「三漕」という地名の由来から教えてください。

初めて見る人は「みづま」って読めないんじゃないかと思います。

書くときも、イノシシという字の「日」の上に「、」がありますよね。

そもそもどんな由来があるんですか？

北村 三漕地域は、3~4世紀の古代時代に有明海の海岸線が今よりもっと近くて、洪水を繰り返していました。

筑後川から溢れた水が、たくさんの沼を作った湿地帯だったことから、

「水の沼」と書いて「みぬま」と呼ばれていたそうです。

これがなまって鎌倉時代頃から「みづま」と呼ばれ、濁点がついて、

曖昧になっていったそうです。

ちなみに、さんずいにイノシシと書く「漕」には「水のあるところ」という意味があるそうです。

坂本 やっぱり、このあたりは歴史をひも解くと筑後川が大きく関係しているんだなと改めて思いますね。

少し土地が低く、水が多かったということなんですね。

北村 水沼は日本で一番古い歴史書「日本書紀」にも登場しています。

ヤマトタケルノミコトの兄と伝えられる景行(けいこう)天皇が九州を行幸(ぎょうこう)した際に、

「水沼縣主(みぬまのあがためし) 猿大海(ざるおおみ)」という人が、

八女の山々を眺めている景行天皇に、山の中に「八女津姫(やめつひめ)がいます」と

説明したということなんです。

坂本 なかなか古い歴史がありますね。

それだけ歴史があるということは、当時を知るような遺跡なんかもあるんでしょうか？

北村 そうなんです。実は、三潴地域では、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡や古墳が20か所近く見つかっています。

例えば、三潴エリアの高三潴遺跡では、2017年に弥生時代後期に作られたとみられる、ガラス装飾品のネックレスやブレスレットのような連玉(れんぎょく)が出土しました。

国内最古級で、当時から中国大陸との交易があっていたと推測されています。

坂本 思い出しました。すごいものが見つかったと、記者発表もしましたね。

他にはどんなものが見つかっているんですか？

北村 高三潴エリアの小学校近くにある高良御廟塚古墳(たからごびょうづかこふん)では、銅剣が出土していますし、

西牟田にある十連寺古墳(じゅうれんじこふん)では、甕棺(かめかん)も出土しています。

共通しているのは、その場所が周りより少し標高が高いということです。

洪水が度々起きていた地域なので、先人たちも高い場所に家をつくり暮らしていたことが伺えます。

坂本 なかなかいろんなことがわかるんですね。

遺跡以外ではどんなものがありますか？

北村 三潴は特に小高いところに歴史的なものがたくさんあるんですが、

三潴小学校の西側に「弓頭(ゆみがしら)神社」があります。

これは創建から1900年ほどの歴史があるとされていて、

日本で最も古い時代の神社だと言われています。

こちらには、景行天皇の皇子「水沼君(みぬまのきみ)」が祀られていて、

三潴を治めていた歴史を垣間見ることができます。

私も初めて見たとき、どうしてここにこんな紋様があるのかと驚いたのですが、

天皇家に由来するために、神社には菊の紋(もん)が使われていて、

境内から銅剣などが発掘されています。

江戸時代には、久留米藩の藩主が参拝に訪れていた記録もあり、

昔から重要な場所だったんでしょうね。今は、春の藤棚がきれいで有名ですよ。

坂本 ここまで聞くだけで三潴は相当歴史が深いし、もしかすると古代日本で、とても重要な場所だったように思えますね。ぐっと時代を進めて、近代になるとどんな感じなんでしょう？

北村 明治維新の廃藩置県では、筑後地方と佐賀県を含めて「三潴県」があったのはご存じですよ。

県庁は久留米の城南町で、福岡県に合併される2年間という短期間でしたが、

三潴県が続いていたらどうなっていたかなと思うこともありますよ。

坂本 上半分が福岡県、下半分が三潁県だったかもしれないということですよ。  
歴史を感じますね。そうなる、もしかしたら、今とは違う社会になっていたかもしれないですね。

北村 ところで話は変わりますが、地域産業を結ぶ幹線として明治 45 年から昭和 26 年まで、  
大川鉄道が大善寺から枝分かれして三潁の早津崎と大川市の若津港を結んでいました。

坂本 三潁小学校の前に、小さな機関車がありますが、  
あんなかわいらしい汽車が三潁と大川の間を走っていたんですね？

北村 そうですね。沿線の城島といえば酒と瓦、大川といえば木工製品に酒と畳が特産品で、  
それまで筑後川を使って運んでいたものを、より早く各地に運ぶことを目的に、  
有力者が資金を出し合って大川鉄道を敷設しました。  
昭和の初めには、西鉄の前身である九州鉄道が柳川から大牟田、  
そして熊本まで路線を伸ばそうとしましたが、国が認可しなかったので、大川鉄道を買収して、  
大川を回り大牟田まで通じる鉄道を造ろうとしていた記録も残っています。  
ただ、大善寺から大川の方に回らずに柳川の方に真っすぐに行って、  
今の西鉄大牟田線ができたということだそうです。

坂本 場合によっては、今とは違う風景になっていたかもしれませんね。  
歴史をひも解くといろんな可能性があったことが分かって、面白いですね。

北村 戦前から戦後にかけては、久留米市内にあった軍の施設やゴム工場に通勤する人、酒、畳、  
木工製品を小さな機関車で運んでいましたが、  
採算が合うほどの輸送量がなく、戦後間もなく運行が停止されました。  
戦後の復興により道路整備が進み、トラック、バスに輸送は代替えされていき、  
昭和26年に正式に廃止となりました。  
現在の軌道敷は歩道を主とした道路に整備され、  
歩道の路面にはブロックで線路の様子が描かれています。

坂本 軌道跡には線路の様子がタイルで示されています。  
三潁小学校前や三潁高校の近くにもありますので、歩いてみるのも面白いかもしれません。  
北村さん、今回も三潁の面白い話をありがとうございました。  
来週はシリーズの最後となる 4 回目『三潁においてよ』というテーマで、  
観光やおみやげの話題などをお送りします。  
お楽しみに！